

どんたく

絵入り小唄集

竹久夢二

青空文庫

こはわが少年の日のいとしき小唄なり。

いまは過ぎし日のおさなきどちにこのひとまきをおくらむ。

お花よ、お蝶よ、お駒よ、小春よ。太郎よ、次郎よ、草之助よ。
げに御身たちはわがつつたなき草笛の最初のききてなりき。

[NE'MU-NO-KI NE'MU-NO-KI]

[NE'YA SYANSE'.]

[OKANE' GA NATTARA]

[OKYA SYANSE'.]

どんたく

歌時計

ゆめとうつつのさかひめの
ほのかにしろき朝の床^{とこ}。

かたへにははのあらぬとて

うたひどけい
歌時計のその唄^{うた}が

なぜこのやうに悲しかろ。

ゆびきり

指^{ゆび}をむすびて「マリヤさま

ゆめゆめうそはいひませぬ」

おさなききみはかくいひて

涙うかべぬ。しみじみと

雨はふたりのうへにふる

またスノウドロップの花びらに。

紡車

しろくねむたき春の昼

しづかにめぐる 紡車いとぐるま。

をうなの指をでる糸は

しろくかなしきゆめのいと

をうなの唄うたふその歌は

とほくいとしきこひのうた。

たゆまずめぐる 紡車いとぐるま

もつれてめぐる夢ゆめと歌うた。

人買

秋のいり日はあかあかと

蜻蛉とんぼとびゆくかはたれに

堀へいのかげから青頭巾あをつきん。

「やれ人ひとかひ買ひとかひぢや人ひとかひ買ひとかひぢや

どこへにげようぞかくれうぞ」

赤い蜻蛉とんぼがとびまはる。

六地蔵

せなかあはせ
背合の六地蔵ろくぢざう

としつきともにすみながら

ついぞ顔かほみたこともない。

でもまあ苦くにもならぬやら

いつきても年としとらず

赤くはげたる涎よだれ掛かけ。

越後獅子

かくべゑあへ獅子しのかなしさは

親おやが太鼓たいこうちや子こがおどる。

股またのしたから峠たうげをみれば

もしや越後あちこの山かとおもひ

泣いてたもれなともどもに。

かくべゑあへ獅子しの身みのつらさ。

輪廻りんねはめぐる小車をぐるまの

蜻蛉とんぼがへりの日ひもくれて
旅籠やどをとろにも銭ぜにはなし
あひの土山つちやまあめがふる。

赤い木の实

雪ゆきのふる日に小兎ことうさぎは

あかい木この实みがたべたさに

親おやのねたまに山やまをいで

城しろの門もんまできはきたが

あかい木この实みはみえもせず

路みちはわからず日はくれる

ながい廊下らうかの窓まどのした

なにやら赤いものがある

そつとしのむできてみれば

こは姫君ひめぎみのかんざしの

珊瑚さんごのたまかはつかしや

たべてよいやらわるいやら

兎うさぎはかなしくなりました。

鐘

村で名代なだいの鐘かね撞つき男をとこ

月がよいのでうかうかと

鐘かねをつくのもつひわすれ

灯ひのつく街まちがこひしさに

山みなとから港へではでたが

日やまがくれるのに山寺やまでらの

鐘かねはつんともならなんだ

村そんちやう長ちやうさまはあたふたと

かねつきだう
鐘撞堂へきてみれば

いんべとくり
伊部徳利に月がさし

ちんちろりんがないてみた。

アトレの馬ではあるまいし

かね
鐘がならうがなるまいが

子供のしつたことでないし

さるべん
うらの菜園の椎の木に

ザボンのやうな月がでた。

ゆく春

くれゆく春のかなしきは

しらがあたままたんほほ
白髪頭の蒲公英の

むく毛げがついついとんでゆく

風がふくたびとんでゆき

若い身みそらではげあたまま頭。
禿頭。

くれゆく春のかなしきは

薊あざみの花をつみとりて

とんとたたけば馬がでる

そつとはらへば牛がでる

でてはびよんぴよんにげてゆく。

くすり

雪^{ゆき}はしんしんふりしきる。

炬燵^{こたつ}にあてたよこはらが

またしくしくといたむとき。

雪はしんしんふりしきる。

しろくつめたき^{こな}粉ぐすり

熱^{した}ある舌にしみるとき。

雪はしんしんふりしきる。

黄きいな袋ふくろの石版いしずりの

異形いぎやうな虫むしのわざはひか。

雪はしんしんふりしきる。

銀ぎんぎらぎんのセメンえん円

とのもは雪のつむけはひ。

雀踊

青い眉まゆしたたをやめが

金きんの墨すみ絵ゑの扇あふぎにて

そつとまねけばついとくる

はらりとひらけばぱつととぶ。

雀すずめおどりのおもしろさ

やんれやれやれやせうめ

京きやうの町のやせうめ

うつるるものはみせうめ

あれあれあれとみるほどに

やつこすがた
奴姿のこすゞめ小雀は

やま
山のあなたへとびさりぬ。

わたり鳥

日本にほんの春のこひしさに

シイオホスクの海角みさきより

はるばる波をわたり鳥どり。

庄しやうや屋のきの軒すに巢をかけて

雛ひなを六羽むつばうんだれど

三羽さんばの雛ひなは死しにました。

のこる三羽さんばは柿かきの葉はの

毛虫けむしがすきでたべました。

やんがて柿かきのうれるころ

日本にほんの島しまをあとにして

まだみもしらぬ故郷ふるさとへ

親子おやこもろともいにました。

納戸の記憶

ふね さかぶねちち ふね
船は酒船父の船

たん ほ
三十五反の帆をまくや

げんかいなだ なつ くも
玄海灘の夏の雲。

きみ ぼくわん うた
君は馬関の唄うたひ

かみ エメラルド
髪にさしたる青玉

みなみ
あだな南のニグレスが

みつきもの
こころづくしの貢物。

風かぜのたよりをまちわびて
 行あんど燈どのかけのものおもひ
 鬢びんのほつれをかきあぐる
 銀ぎんのかざしのかなしさか
 母はの腕かひなのさみしさか。

おしのび

昔^{むかし}アゼンに王^{わう}ありき。

野^のにさく花^{はな}のめでたさに

ひとり田舎^{ゐなか}へゆきけるが

にわか^{あめ}に雨のふりいでて

王^{わう}は臍^{へそ}までうまりける。

それより王^{わう}はわすれても

二度^どと田舎^{ゐなか}へゆかざりき。

1

ドンタクがきたとてなんになる

子供は芝居しばゐへゆくでなし

馬うまにのろにも馬はなし

しんからこの世よがつまらない。

2

おうちに屋根やねがなかつたら

いつも月夜つきよでうれしかろ。

あの門もん番ばんが死しんだなら

あの柿^{かき}とつてたべよもの。
世界^{せかい}に時計^{とけい}がなかつたら
さみしい夜^{よる}はこまいもの。

3

もしも地球^{ちきう}が金平糖^{こんぺいたう}で

海^{うみ}がインク^{いんく}で山^{やま}の木^きが

飴^{あめ}と香桂^{にっけ}であつたなら

なにをのんだらいいだろう。

学^{がく}校^{かう}の先^{せん}生^{せい}もしらなんだ

国^{こく}王^{わう}様^{さま}もしらなんだ。

4

この紅茸べにたけのうつくしき。

小供こどもがたべて毒どくなもの

なぜ神様かみさまはつくつたる。

毒どくなものならなんでまあ

こんなにきれいにつくつたる。

5

ままごとするのもよいけれど

いつでもわたしは子供役。

子供が子供になつたとて
なんのおかしいことがある。

6

どんなにおながかひもぢうても
日本にほんの子供はなきませぬ。
ななみだいてゐるのは涙です。

7

お墓はかのうへに雨がふる。
あめあめふるな雨ふらば

五重ぢゆうたふの塔たふに巢すをかけた

かわい小鳥こどりがぬれよもの。

松こずゑの梢かぜを風かぜがふく。

かぜかぜふくな風ふかば

けふ巢すだちした鳶とびの子こが

路みちをわすれてなかうもの。

8

ひろい空からふる雨は

森のうへにも牧場まきばにも

びつくり草さうにも小鳥こどりにも

みんなのうへにふるけれど
子供のうへにはふりませぬ。

それは子供の母親が
シヤツポをきせてくれるから。

9

枇^び杷^はのたねをばのみこんだ。

おなかのなかへ枇杷の木が
はえるときいてなきながら
枇杷のなるのをまつたが
いつまでたつてもはえなんだ。

10

めんない千鳥ちどりの日もくれて

おぼろな春のうすあかり

この由良鬼ゆらわにのいとほしさ

ほどいてたもとなきいでぬ。

11

越えつちゆう中とやま富山の葉くすりう売り

おはぐろとんぼがついとでて

白いカウモリ傘がさの柄えにとまり

また日^ひまわりの葉^はにとまり
ついととんではまたもどる。

12

お遍路^{へんろ}さんお遍路さん

おやまのむかふは雨さうな

あられ
霰^{あられ}をおくれ豆^{まめ}おくれ

まめがなけねばこの路^{みち}法^{ほつ}度^と。

13

また
股^{また}のしたから麓^{ふもと}をみれば

さても絵のよなよい景色^{けしき}。
どこの町ぞときいたらば
それはわたしの村でした。

14

梭^{おさ}の手^てをやめ歌^{うた}ふをきけば

——もつれた糸^{いと}なら

ほどけもせうが

きれた糸ゆる

せんもなや。

少年なりし日

人形遣

「めでたやなめでたやな

さりとはめでたやめでたや」と

紺こんの布簾のれんのつまはづれ

人形遣にんぎよつかひがきたさうな。

母のかげよりそとみれば

人形遣のうら若く

「ま、どうしよぞいの」と泣なきいれば

襟えりあし足あししろくいぢらしく

人形こはるの小春もむせびいる。

もののははれかふるあめか
もらひなみだの母そでの袖。

雪

赤いわたしの襟えりまき巻まきに

ふわりとおちてふときえる

つもらぬほどの春の雪。

これが砂糖さとうであつたなら

乳母うぼもでてきてたべよもの。

ロシア更紗ざらさの毛布けふとん団だんを

そつとぬけでてつむ雪を

銀ぎんのかざしでさしてみる

お染そめの髪かみの牡丹ぼたん雪ゆき。

七番ばんぐら蔵くらの戸とのまへで

手招てまねきをするとうじさん

顔かほににげない白い手てで

ひねり餅もちをばくれました。

納戸なんどのおくはほのくらく

紀州蜜柑きしうみかんの香かもあはく

指ゆびにそまりし黄表紙きべうしの

炬燵こたつで絵本ゑほんをよみました。

まど
窓からみれば 下町したまちの
かど
角の床屋とこやのガラス戸どに
おほさかくだ
大阪下り雁がんじろ二郎の
はるぎやうげん
春狂言はるぎやうげんのびらの絵が
雪にふられておりました。

かくれんぼ

豆^{まめ}の畑^{はたけ}にみいさんと

ふたりかくれてまつてゐた。

とほくで鬼^{おに}のよぶ声が

風^{かぜ}のまにまにするけれど

ちらちらとぶは鳥^{とり}の影^{かげ}。

までどくらせど鬼はこず。

森もりのうへから月がでた。

郵便函

郵便函ゆうびんぼこがどうしたら

そんなにはやくあるくдаро。

わたしの神戸かうべのおばさまへ

わたしのすきなキヤラメルを

おくるやうにとしたためて。

郵便函へあづけたが

三つほどねたそのあした

わたしのすきなキヤラメルは

ちやんとわたしについてゐた。

山賊

乳母うばの在ざい所しよは草わけの

山また山の奥でした。

ある日のことに柿のつくり」、80-6」 《あね》として

乳母うばをたづねにゆきました。

わたしは土産みやげを腰につけ

柿のつくり」、80-6」 《あね》は日傘ひがさをさしかけて

赤土色あかつちいろの山路やまみちを

とぼとぼあゆむ午ひるさ下り。

あゆみつかれて路みちばたの

一本松に腰かけて

虎とら屋やまんじゆう 饅頭まんじゆうをたべながら

やすむでゐると木蔭こかげより

髯ひげむし武者やづら面の山賊さんぞくが

ぬつくとばかりあらはれた。

すわことなりとおもへども

どうすることもなきごえに

「おつつけ伴者つれのくる時刻じぶん」

きこえよがしに柿のつくり」、 82-1] 《あね》のいふ

「どうして伴者つれはくることか」

わたしは柿のつくり」、82-3] 《あね》にききました。

さうするうちに山賊は

腰の太刀こし だんびらおつとりて

のそりのそりとやつてきた。

もう殺すかとおもふたら

殺しもせいでたちとまり

「どこへおじやる」ときくゆゑに

つつみかくさずいひますと

「よいお子こたち」とほめながら

峠たうげをおりてゆきました。

ばあや
乳母はきいて大笑ひ

「なんの賊ぞくなどでませうぞ」

それは木樵きこりでありました。

おさなき夢

夢のひとつは　かくなりき。

青き頭巾づきんをかぶりたる

人ひと買かひの背せにないじやくり

山みさきの岬をまはるとき

広ひろしげ重うみの海ちらとみき。

旅だうじやの道者がせおいたる

天狗てんぐの面めんのおそろしき

にげてもにげてもおふてきぬ。

伊勢いせの国までおちのびて

二見ふたみヶ浦うらにかくれしが

ここにもこわや切髪きりかみの

淡島あはしま様さまの千羽せんば鶴づる

一羽いちばがとべばまた一羽いちば

岩いのうへより鳥居とりゐより

空一面そらのうろこ雲。

顔かほもえあげずなきゐたり。

草餅

ある日学校へゆく路みちに

黄きいな袋ふくろがおちてゐた

ひろうてみればこはいかに

それは財布さいふでありました。

「さあ大変ぢや大変ぢや

銭ぜにをひろへば尋たづね人びと

有司おかみへよばれようとお怖こはや」

みながはやせばとつおいて

財布さいふを指でさげたまゝ

こりやまあどうしたものだらう。

そこへおりよく先生が

おいでなされて「やれやれ」と

財布をとつてくれました。

それから家うちへかへつたが

どうも財布が気にかかり

母なまけの情くさもちの草餅も

どうまあ咽喉のどをこすものぞ

食くべずに泣ないておりました。

嘘

なげた石

とりゐ

鳥居のうへへのつかれば

どんな願ねがもかなへんと

うちがみさま

氏神様はのたまひぬ。

鳥居のしたにあつまりし

たらう

太郎じらうに草之助さうのすけ

なに

何がほしいときいたらば

太郎がいふには犬張子いぬはりこ

次郎がいふにはぶんまはし

生きた馬をば草之助。

願ねがひをこめてなげた石

首尾しゆびよく鳥居へのつかつた。

石は鳥居へのつたれど

いまだに何もなにくださらぬ。

どんたく

どんたくぢやどんたくぢや
けふは朝からどんたくぢや。

まち かど
街の角では早起きの
あめや
飴屋の太鼓たいこがなつてゐる

「あアこりやこりやきたわいな」

これは九州きゅうしゅう長崎ながさきの

丸山まるやま名物めいぶつぢやがら糖たう

お子様こさまがたのお眼めぎまし

甘あまくて辛からくて酸すっぱくて

きんぎよくれんのかくれんぼ

おつぺけぼうのきんらいらい

観音堂くわんのんだうの境内けいだいは

のぞきからくり犬芝居いぬしばゐ

「もののためしぢやみてござれ

北海道で生捕いけどつた

一本毛いっぽんけのないももんがあ

絵看板ゑかんばんにはうそはない

生きてゐなけりやぜに銭やいらぬ」

「可か哀あいさうなはこの子でござい

因果はめぐるみづぐるま水車

一寸いっすんほふし法師の綱つなわたり

あれせんぼん千番いちばんに一番の

鐘かねがなるともお泣きやるな」

「やあれやれやれやれきたわいな

のぞきやはちもん八文てんぼせん天保銭

花のお江戸ははつぴやくやちやう八百八町

おと
音にきこえた八百屋の娘

とし
年は十五で 丙 午
ひのえうま

そなたは十四であらうかの

いえいえ十五でござんする。

やほや
八百屋お七がおしおきの

お眼めがとまれば 千客せんきやく様
「

郵便脚夫

「郵便いっぴんほい

「おかみの御用でゑっさつさ」

郵便脚夫きやくふのうしろから

学校がへりの子供らは

ゑっさもつさとついでゆく。

「郵便ほい

「おかみの御用でもつさつさ」

江戸見物

「江戸えどをみせよう」源六げんろくは

耳をつまんでつりあげた。

いたさひがしこらへて東をみれど

どれが江戸やら山ばかり。

「なんとみえたであらうがな」

「みえはみえたが浅草あさくさも

上野うへもやつぱり山だらけ」

七つの桃

七人の

遊仲間あそびなかまのそのひとり

水におぼれてながれけむ。

お芥子けしの頭かみが水みづの面もに

うきつしづみつまえかくれ。

「よくも死人しにんをまねたり」と

白痴ばかの忠ちゆうた太は手をたたく。

水みづにもぐりて菱ひしの実みを

とりにゆけるとおもひしが。

人は家いとより畑はたけより

ただごとならぬけはひにて

はしりて河かはにあつまりぬ。

人のひとりは水にいり

人のひとりは小舟こぶねより

死骸しがひを岸にだきあげぬ。

「死しんだ死しんだ」と踊をどりつつ

忠太は村をふれあるく。

白きぬい衣きぬきた葬さうれん輦が

暑ひなかい日中をしくしくと

鳥辺とりべの山へいりしかど

そは何事なにごとかしらざりき。

ひとりなは墓はかへゆきければ

七なつの指ゆびを六むつおりて

一ひとつのこしてみたれども

死んでなくなることかいな

いつか墓はかよりかへりきて

七なつの桃ももをわけようもの。

猿と蟹

わたしが猿さるいもうとで妹が

あはれな蟹かにでありました。

猿はひとりで柿かきの実を

木に腰こしかけてたべました。

「兄にいさんひとつ頂ちやうだい戴よ」

あはれな蟹がいひました。

「これでもやろ」と渋しぶ柿がきを

なげてはみたがかあいそで
好いのもたんとやりました。

加藤清正

紙よろひのきよまさ正は

とらたいち虎を退治の竹やりの槍。

屋根やねのうへにて眠りねむるし

猫ねこをめがけてつきければ

虎は屋根よりころげおち

縁えんのしたへとかくれけり。

さすがに猛たけき清正も

虎のゆくえの気にかかり
夜^よな夜^よなこわき夢^{ゆめ}をみき。

禁制の果実

しらかべ
白壁へ戯^{ざれゑ}絵をかきし科^{とが}としてくらき土蔵^{どくらう}へいれられぬ。よべどさけべど誰^{たれ}ひとり小鳥^{ことり}をすくふものもなし。泣きくたぶれて長持^{ながもち}の蓋^{ふた}をひらけばみもそめぬ「未知^{みち}の世界」の夢の香^かに

ちいさき靈たまは身みにそはず。

窓より夏の日がさせば

くにさだ

国貞ゑんゑがくゑぞうし絵草紙の

にせむらさき

「きり修しゆ紫し」の桐きりの花はな

ひかるきみ

光ひかるの君きみの袖そでにちる。

摩耶まやの谷間たにまにほろほろと

びんが

頻びんが迦とりの鳥とりの声こゑきけば

しつたたいし

悉多しつたたいし太子たいしも泣なきたまふ。

魔性ましやうの蜘蛛くもの糸いとにまかれ

白縫しらぬひ姫ひめと添臥そひぶしの

風は白帆しらほの夢をのせ

いつかうとうとねたさうな。

蔵くらの二階にがいの金網かなあみに

赤い夕日あかひがかつとてり

さむれば母ははの膝ひざまくら。

日本のむすめ

宵待草

まてどくらせどこぬひとを
よひまちぐさ
宵待草のやるせなさ

こよひは月もでぬさうな。

わすれな草

たもと
袂の風を身にしめて

ゆふべゆふべのものおもひ。

野のずえはるかにみわたせば

わかれてきぬる窓の灯ひの

なみだぐましき光ひかりかな。

たもと
袂をだいて木によれば

やぶれておつる文ふみからの

またつくろはむすべもがな。

わすれな草ぐさよ

なれが名なを

なづけしひとも泣きたまひしや。

夏のたそがれ

タンホオルの鐘かねが

さはやかになりいづれば

トラピストの尼あまは

こころしづかに夕ゆふべの祈いのりをささげ

すぎし春はるをとむらふ。

柳やなぎ屋のムスメは

はでな浴衣ゆかたをきて

いそいそと鈴虫すずむしをかひにゆく

——夏のたそがれ。

うしなひしもの

夏の祭まつりのゆふべより

うしなひしものもとめるとて

紅べにちやうちん提燈ひに灯をつけて

きみはなくなささまよひぬ。

芝居事

雪のふる夜のつれづれに

柿のつくり」、123-5] 《あね》のこそで小袖をそとかつぎ

……でんちうちやはりひじぢや

しまさんこんさんなかのりさん……

おどりくたびれそではぎ袖萩の

肩に小袖をうちかけて

なみだしばぬことながらの芝居事

「さむかろうとてきせまする」

このまあつもる雪わいの。

花東

ありのすさびに

花をつみてつがねたれど

おくらむひともなければ

こころいとしづかなり。

されどなほすてもかねつつ

ゆふべの鐘かねをかぞへぬ。

たそがれ

たそがれなりき。かなしさを

そでにおさへてたちよれば

カリンの花のほろほろと

髪かみにこぼれてにほひけり。

たそがれなりき。路みちをきく

まだうら若き旅たび人の

眉まゆの黒子ほくろのなつかしく

うしろすがた
後姿のなかれけり。

かへらぬひと

花をたづねてゆきしまま

かへらぬひとのこひしさに

岡をかにのぼりて名なをよべど

幾いくやまかは山河は白雲しらくもの

かなしや山彦こだまかへりきぬ。

よきもの

「よきものをあたへむ」ときみのいふゆゑ
ゆびきりかまきりいつはりならじと

きみのいふゆゑ
門もんのそとにてきみまちぬ。

井戸ゐどのほとりの丁子ちやうじの花よ。

見知らぬ島へ

ふるさとの山をいでしより

旅にいくとせ

ふりさけみれば涙わりなし。

ふるさとののははこひしきか。

いないな

ふるさとのいもとこひしきか

いないないな。

うしなひしむかしのわれのかなしきに
われはなくなり。

うき旅の路はみちつきて

あやめもわかぬ岬みさきにたてり。

すべてうしなひしものは

もとめむもせんなし。

よしやよしや

みしらぬ島の

わがすがたこそは

あたらしきわがこころなれ。

いざや いざや

みしらぬ島へ。

てまり

……ひや ふや おこまさん

たばこのけむりは丈八じゃうはつあん……

とんとんとんとつくてまり

しろい指からはなれては

蝶てふが菜なのはをなぶるよに

やるせないよにゆきもどり。

ゆらゆらゆれる伊達だ帯らりから

江戸えどむらさき紫むらさきの日がくれる

たもと

そつといだけばしんなりと

あまへるやうにしなだれかゝる

——わたしのたもと。

はづかしさの顔かほをおほへど

つゝむにあまるうれしさがこぼれでる

——わたしのたもと。

わたしのかなしみも

わたしのよろこびも

みんなおまえはしつてゐる

——にくらしいたもとよ。

かげりゆく心

母にそむきしその夜よより
しらかべ白壁によるならはせに
つゆぐさ露草の花さきにけり。

こゝろもとなき夕ゆふづき月の
 夢の小径こみちにきえゆけば
 ねもたえだえに虫なけり。

雀の子

とこどんどこぴいひやらひやあ
 麦むぎの畑はたけを風がふく。

役者やくしやの群むれをはぐれたる

子供心こころのはかなさは

……うちの裏うらのちさの木に

雀すずめが三羽とうまつて

一羽の雀がいふことにや

ゆうべごぎつた花嫁御はなよめご

なにがかなしゆてお泣きやるぞ

おなきやるぞ……

ゆうべの芝居のその唄うたが

いまのわが身につまされて

ほろりほろりとないてゆく。

異国の春

につぼんムスメのなつかしさ

牡丹ぼたん芍しやくやく薬やくやま桜ざくら

金欄きんらん緞子どんすのオビしめて

ふりのたもとのキモノきて

丹塗にぬりのポクリねもかろく

からこんからことゆきやるゆえ

どこへゆきやるときいたらば

娘むすめざかりぢや花ぢやもの

後ご生しやうよいよてらに寺てらまゐり。
寺てらまゐり。

白壁へ

ふたりはかきぬ。

「しらぬこと」

ふたりはかきぬ。

「よろこび」と

ふたりはかきぬ。

「さよなら」と。

青空文庫情報

底本：「どんたく」中公文庫、中央公論社

1993（平成5）年7月10日発行

底本の親本：「どんたく」実業之日本社

1913（大正2）年11月発行

入力：星夕子

校正：Juki

2000年10月12日公開

2006年1月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

どんたく

絵入り小唄集

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 竹久夢二
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>